
好きな人

鈴蘭

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな人

【Nコード】

N6030Y

【作者名】

鈴蘭

【あらすじ】

たくさんの短編集を書きたいと思っています!!
誤字脱字目立つと思います!

Happyウエディング！

ずっと待ってたこの日。

俺と蘭が結ばれるこの日。

蘭に気持ちいを伝えた時の日を思い出す。

俺がコナンから工藤新一に戻った時、蘭は泣いて喜んで、真実を聞いて泣いて許し、やさしくだいてくれた。

蘭は強かった。

でも、蘭は泣いて泣いて・・・

そつ、泣かしている張本人はこの俺。

だから、蘭に気持ちを伝えた。

蘭が俺のことが好きではないなら、もう蘭を泣かせないため、消えようと思っていた。

でも、蘭は泣いて「私も好き」と言っていた。

その時、俺は半ば無理やりのキスをした。

その後、蘭と楽しく話していた。

その日から一年たったこの日。

ついに俺達はこの日を迎えたのだ。

今俺はウエディングドレス姿で来る最愛の人を待っている。

彼女を幸せにして見せるのだ…

信じているからね（前書き）

WISHO2さんからのご提案です！

変なところがあるかもしれませんがよろしく願います！

信じているからね

「はぁはぁはぁっ！」

新一はある場所へと全速力で走っていた。

ずっと自分を待たせ続けた最愛の人に会いに行くため、こんな夜中でも走っていた。

小さく街灯が新一の体を光らせていた。

汗はたくさん。もう体がへとへとになるまで、最愛の人のところに向かっている。

最愛の人の家の前まで来ると、新一はたくさんインターホンを押した。

強く願っていた。

最愛の人がもう誰かのことを好きになっっていないか、自分のことを忘れていないか・・・

「はい！」

中から最愛の人の声がする。

新一はその声にはあつと顔を明るくした。

最愛の人はドアを開けると新一の姿を見た途端、一瞬にして涙があふれた。

「蘭…ごめんな…」

「バカ…何してたのよ…ずっとずっと待ってたんだからあ！」

蘭は新一に抱きついた。

新一はいきなり蘭が抱きついたので驚きだったが、そのうちに、自分がコナンだったこと、トロピカルランドのこと・・・たくさん

のことを話し始めた。

蘭は何も言わず黙って聞いていた。

「本当にごめんな…」

「バカ…謝らないでよ。新一は悪くないじゃない。私は新一が戻ってきたことだけでうれしいよ?」

新一は蘭の言葉にありがとうと言い、半ば無理やりの口づけをした。

「蘭…好きだ…この地球上の誰よりも…」

新一は穏やかな声で蘭に告げる。

蘭は泣きながら「私も…好き」と言った。

新一はよかったとつぶやくともう一度蘭の影と重なった。

この記念すべき日の一年たったこの日。

今日は二人の最高の思い出となる日が生まれる。

2人は神父さんの問いに同じ答えをした。

そして、蘭は庭に出て、ウエディングブーケを投げた。そのブーケは園子へと渡って行った。

園子は嬉しそうにブーケを握りしめた。

蘭もうれしそうにほほ笑む。

「なあ蘭。俺、本当に蘭の隣にいていいのか?」

いまさらといつていいほどの時間で新一が蘭に聞いた。

蘭はあっけらかんと言いたそうな顔で答える。

「あたりまえじゃない。私は新一じゃないとだめなんだよ?」

そして、優しい笑顔を見せながら、新一の頬にキスを落とした。

新一は顔を赤くしていた。必死でポーカーフェイスを保とうとしているがもう駄目である。

そして、新一は蘭をお姫様だっこして車に乗せ、工藤邸へと向かった。

こうして、2人の記念すべきは迎えられたのである。

「ねえ新一。今も私のこと愛してる？」

子供に恵まれた蘭はアルバムを手にしながら新一に聞いた。
新一は何も言わずにいきなりキスをする。

「こういつこと。」

新一はそういうと蘭を抱きしめた。

「愛してるよ…ずっと…一生な…」

穏やかな声で言う新一。蘭は嬉しそうに
「私も愛してるよ…」

と囁いた。

信じているからね（後書き）

どうでしたか？

ちょっと変でしたかね…？

勝てない(前書き)

オリキャラ登場ということですよ！

勝てない

私の名前は清水亜海。

元気で明るい女子高生です！

そしてそして、私に初恋が訪れました！

お相手は工藤新一君！

私は新一君って呼んでるの！

でも、私にライバルがいる。

毛利蘭。

超嫌い！新一君にべったりしちゃってさ！

私の新一君なのにいゝ！

「新一君！亜海のこと好きい！？」

「好きじゃねーよ。」

「むうゝ！」

まあいいわ。きっと好きになるはずなの！

「蘭！今日のご飯ハンバーグな！」

「わかったわよ。」

ちよつとまってえー！なにになに！？何で毛利さんに聞くわけえゝ！？？

私は適当に底ろにいる人に聞いた。

2人の関係は何なのかと…

「夫婦よ！夫婦！」

ふう・・・ふう？

私の心の叫びが口に出そうなくらい大きなものだった。
夫婦になっていたとは…

そうして、私の初恋という花は一瞬にして花びらへと変わり、散ってしまった。

でも、毛利さん。やっぱりライバルなのよ！？
毛利さんよりいい恋見つけるんだから！

勝てない(後書き)

最後はハッピーエンド!?

作品のネタくださーい!
ネタ切れ中の鈴蘭です…

長年の初恋（前書き）

もしも、園子が新一のことが好きだったらという話を書いてみました。

でも、新蘭です。

園子と蘭の友情が深まる話ですね。

長年の初恋

私の名前は鈴木園子。

鈴木財閥の一人娘。

私は長年の初恋をしてきた。

そして、つい最近その初恋は終わってしまった。

私の初恋の人が私の親友と付き合ったのだ。

幸せそうな顔をして。

憎んだ。

私の親友を憎み憎んだ。

好きな人を奪った親友を恨んだ。

でも、彼女に勝てるはずがないの。

女の子がほしそうなものをすべて持っている彼女にはだれひとり勝ったことはない。

おまけに、天然で優しくて…

最高の人。

「園子…！」

「蘭…」

「新一！帰ろうよ！」

蘭は新一君を呼んでいる。

つい最近、蘭と新一君は付き合った。

そして、私の初恋は一瞬にして砕け散った。

そう、私の初恋の人は新一君なのだ。

蘭は私の親友。

「おうっ！」

かつこいい新一君。

その彼を手にした蘭。

2人とも幸せそうだった。

私には到底無理みたいだね…

「園子、聞いて！新一がねっ！」

下校途中、蘭が新一君のことで話していた。

新一君もけらけら笑っていた。

私は無理して笑っている。

2人の幸せ話なんか聞きたくない。

「.....じゃないわよ...!」

「え.....?」

とうとうブチ切れた私。

もう…

とまることはないだろう…

「ふざけんじゃないわよお！……！……！」

「園子…?!」

「何よ！幸せそうな顔して！私の幸せを奪って！！」

好きだったのよお！新一君があ！蘭に新一君を奪われるなんてえ！

！蘭のせいよお！蘭の…蘭の…！！」

「園子・・・」

私は泣きながら叫んでいた。

新一君は驚いて何も言えない状態。

蘭も同じ様子だった。

「蘭っ！あんたなんかあ…！あんたなんかあ・・・！！」

「園子おおお！……！！！」

いきなり蘭が叫んだ。私ははつと我に返る。

蘭が叫んだのは私を止めさせるためであろう。
私はどうしようもなくなってその場に崩れ落ちた。
そんな私を蘭はやさしく抱いてくれた。

蘭はやさしかった。
そして、強かった。

私には到底できそうにないことを持っている蘭がうらやましかった。
だから恨んで憎んでいた。

「園子・・・！ごめんね・・・っごめんね・・・っ！園子の気持ち・・・
考えなかったね・・・っ本当にごめんね・・・っ」

蘭も泣いていた。私は蘭の温かい優しい心に静かに包まれていった。

蘭にひどいことをした。
蘭をすごく傷つけた。
謝らなければ・・・

「蘭・・・っ！新一君！ごめんなさい！私・・・」

「園子は悪くない！悪いのは私。新一だって悪くないの。私が園子の気持ちを考えなかったからいけないかったのよ！」

「蘭：俺も悪かったな、園子。」

蘭：新一君：

私：「どんだけ幸せ者なんだろう？」

気づいてなかったただけなんて：

バカだな：私：

「新一君っ！蘭を幸せにしないと、私がとるからね！」

長年の初恋（後書き）

園子と蘭の友情。

新一も今や、温かく見守っています。

蘭の優しさを書いてみました。

小さなLove letter（前書き）

新一が小さい頃に蘭にこっそりあげたラブレターです。
蘭は未だにわかっていません！

小さなLove letter

今日は満月。

新一が窓を開けて、空を見上げた。

空は濃い藍色をして、今にも新一を包み込みそうだった。

蘭と結婚して、二年たつ。

新一は毎日幸せな日々を過ごしていた。

隣で寝ている蘭の寝顔を見て小さくほほ笑む新一。

そんな新一はまた、夜空を見上げると、自分たちが小学二年生のことを思い出した。

「はいみなさん！きょうは、お友達におてがみをかきましよう！」

「はい！」

みんなが一斉に手を上げてこたえる。

そのなかでも、1人、つまらなそうにあくびしている少年がいた。

「ちよつとしんいち！ちゃんとききなよ！」

「へーへー！それで？おまえはだれにかくんだよ？たしか、2人まですだったよな？」

「うん！しんいちと、そのこちゃんだよ！？」

蘭は嬉しそうに話した。

新一も少し顔を赤くしていた。

「しんいちは何にかくの？」

「サッカーともだち。」

「わたしには？」

「かかねーよ」

「ひどーい！わたしはかくのに！？」

「だーっ！うつせーな！」

新一はそれだけ言っていると教室から出て行った。

ちょうど休み時間だったので、怒られなかったが・・・。

「しんいちの・・・ばか・・・」

蘭はそれだけ言っていると園子のほうへ向かった。

そのあと、学校が終わると蘭は一人で帰っていた。

新一と帰りたくなかったのだ。

あんなことを言われてきつと怒っているだろう。

蘭はずっと自分を責めていた。

「しんいちにかくの、やめようかな・・・」

ぼそつと言った。蘭はどうしようか迷ったけど、やっぱり書くことにした。

新一とは幼馴染だから書きたかったのだろう。

『しんいちへ

きつときのうのことでおこっているとおもいます。

ほんとうにごめんなさい。

わたしはただ、しんいちにかいてほしかっただけなの。

ごめんね、じぶんかってだよね？

しんいち、こんなわたしだけど、いつまでもわたしといっしょにいてください。』

蘭はそう書くと、先生に言われたとおり、新一や園子家のポストに入れた。

蘭は次の日、学校に行くのが怖かった。

新一に怒られそうで、新一が無視しそうで。

でも蘭は行くしかなかった。

そして、学校に着くと、新一は何もなかったように接してくれたのだ。

「しんいち、てがみよんでくれた？」

「ああ、ありがとな。」

ちよつと顔を赤くする新一に蘭は嬉しそうにありがとつと言った。

しかし、蘭は気づいてくれなかった。

自分の家のポストに新一からの小さなラブレターが入っていたことを・・・。

そんなことがあったな…と新一はいまになってつぶやく。

そして、新一は小さなキスを蘭の頬に落とした。

「まだわからないんだな。小さなラブレター。」

この幸せ者。」

新一はそついうと蘭の横で寝た。

「ありがとな、手紙。」

小さなLove letter（後書き）

小さい頃の蘭と新一を書いてみました。
変な文章があつたら教えてください。

決まっていること（前書き）

WISHO2さんからのリクエストです！

決まっていること

「ねえ新一…。」

「んだ？」

「みてよ、きれいだよ？」

「何がだよ」

「ほら、雪よ！」

「ふーん」

見ての通り、新一はあまり関心がなく、ただ、敬愛するシャーロット・ホームズの「緋色の研究」を読んでいた。

蘭は新一の答えにむかっと来て

「何よ、本当に関心がないのね…」

とあきれ半分でその場を離れた。

「おい、蘭！まてよ！ったくよぉ、本当のこと言っただけじゃねーかよ。」

新一はそういうと本を机に置き、蘭のもとへ行った。

一応これでも恋人同士などである。

でも、ラブラブな毎日で第三者からみているとうらやましいような恥ずかしいような…？という感覚。

次の日―。

「らーん！あんたたち、恋人になったんだって！？」

2人で投稿して、教室のドアを開けたとたん、蘭の親友で新一の悪友でもある園子がいきなり言いだした。

その声に、教室にいたクラス全員が2人に目線を動かした。

「ほんとかよ！？」

「きゃー！やつとなつたのね！」

「いやー、おめでたい！」

みんな分かりきっていたような声や顔をして2人にからかってくる。

「それで？お二人さん！あんたたちどこまでいったわけえ！？」

「「は？」」

2人は同時にまぬけな声を出す。

その声に園子はずまらなそうに、

「まさか…まだ何もしてないんじゃないでしょうね！？」

と言った。

2人は何も言わずに顔を合わせて真っ赤になった。

まるでユデダコ。

そんな二人にクラス全員が笑った。

「なにになに！？何にもやってないわけえ！？」

「そ、そんなわけ…！」

蘭が一生懸命言おうとするが、何をしたことまでは言えない。

「じゃあなんなのよお！何をしたわけ？」

「うう……」

言葉に詰まる蘭と新一。

そんな二人にクラス全員はからかいまくるのである。

園子は二人には貸せようと一生懸命だった。

その時、教室の前扉が勢い良く開いた。

「おーい！みんな、何をしている……」

「先生！2人が恋人同士になったんです！今、恋人になって何をしたのかはかせている真っ最中ですよ！」

先生、いいですよ？はかせても！」

「……うむ……よしとしよう！はいたら教えるよー！」

と先生は機嫌よく教室を出て行った。

いいんかよ、せんせいがそれで！！（いいのかな、先生がそれで！）

2人は同時にそう思った。

「それで？蘭！新一君！何よー！何したのよー！」

園子は乗り気で聞いてくる。

その反対に蘭と新一は真っ赤になりながら、気まずそうだった。

「なんなら、ここでキスしちゃいなさいよ〜!」

「はあ!?!」

またここで2人で同時に言葉が出る。

「はいはい!キスしちゃって〜!」

「やれよ、工藤!」

「蘭ちゃんやんなさいよ!」

「キース!」

「キース!」

「キース!」

クラスがキスコールを始める。

新一と蘭はどうしていいのか分からなくなった。

「この場でキスしたくなかったら、はくのよ!」

「・・・わかったよ、はくよ、すべて・・・」

そう言い出したのは新一だった。

蘭はええ!と反対していたが、新一がもう言ったので仕方なく動じることにした。

「キスも何回かした。一緒にだって寝てる...」

「それでそれで!?!」

「その後は言えない...」

「あ、やっぱり〜!?!」

その途端、クラスは大賑わいになった。

2人は顔が真っ赤で何も言えずにただただ、黙っていた。

その後、クラスからのキスコールにより、仕方なく、2人は口づけを交わしたのであった。

決まっていること（後書き）

どうでしたか、WISHO2さん！
案外ラブラブなんです！

誰が好き…？（前書き）

新一のことを思う、蘭の気持ちです！

誰が好き…？

「新一は…私のこと好き…？」

蘭は、震える声で新一に聞いた。

「バー口。」

新一が鼻で笑い、答えを出す…。

さかのぼること一時間前。

新一が志保と仲良く街をあるつていたのだ。

そのようすをたまたま、蘭が目撃してしまった。

蘭は新一が浮気をしているのではないかと思った。

しかし、蘭は怒りよりも悲しみにあふれている。

自分より、志保を選んだのである。

婚約までしているに関わらず、志保と一緒に仲良く歩いているとは悲しくなる。

「新一…？」

「ら、蘭！？」

「蘭さん!!?」

三人で驚いている。

これでは三角関係ではないか……。

「どうして…新一と志保が…?」

震えた声で言う蘭。

新一はどうする事も出来ずにあたわたしている。

志保は眼を見開いていた。

「こ、これには、分け合っ……」

だっ!

蘭は新一の話を聞かずに町の中を走って行ってしまった。

新一は蘭を追いかけようと必死で走って行った。

志保はハアとため息をもらしながらあきれていた。

この志保のあきれには何の意味があるのかは、この二人の追いかけてこの後で…。

「おい蘭! までよ!」

新一が必死の思いで蘭の腕をつかむ。

蘭はつかまれた腕を振り払おうともがいている。

そして、今に至る。

「新一は…私のこと好き…？」

「バー口。」

「私は…新一が好きだよ？でも、志保のことが好きなら…新一の好きなようにして…。私の幸せは、新一が幸せなことだよ。」

蘭は半ば泣きそうな顔をして言う。

しかし、新一はふつと鼻で笑った。

「…好きじゃねーよ。」

新一の言葉に蘭は眼を見開き、うつむいた。それを見て新一は、
「ただ…愛してる。」

「え…？」

蘭は顔を上げた。

その顔はかわいらしかった。

「好きななんてものじゃない。愛してるんだよ。」

「でも……どうして？どうして志保と一緒にいたのよ？」

「……ほらよ。」

新一の手には縦長の箱があった。

蘭は？を浮かべると静かに受け取った。

「何……？これ……」

蘭は恐る恐る箱を開けてみると、そこにはあまり派手ではない、ダイヤモンドやパールなどが入れられてあるネックレスがあった。

「こ、これ……？私に……？」

蘭は驚きを隠せない様子だった。

「今日は蘭の誕生日だろ？だからさ、宮野に蘭の喜びそうなのを選んでもらったんだよ。」

「し、新一……ごめんなさい……！」

「いいって蘭！」

その途端、新一は蘭の唇を奪った。

わかつただろうか、志保があきれた理由が。
蘭の単なる誤解から始まったはなしでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6030y/>

好きな人

2011年11月22日01時13分発行